

- 13) なお シンポジウム後に、参加されていた知泉書館の小山氏より、次の書籍を紹介していただいた。これは本報告全般に深く関わる良書であると思う。ピエール・リシェ(岩村清太訳)『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』(知泉書館 2002 年)。

---

## 意見

### 矢内義顕

今回の中世哲学会シンポジウムは、これまでほとんど取り扱われることのなかったテーマ「古代末期からカロリング・ルネッサンスへ——知の断絶か連続か」を取り上げた点で、非常に興味深いシンポジウムであったと思う。野町啓氏の提題は、ポエティウスの受容と影響に焦点を絞ってその写本の伝承を丹念に辿り、清水哲郎氏の提題は、古代末期からカロリング朝にかけての知の在り様を俯瞰するものであった。

さて、古代末期においてどのような問題が残され、それらがカロリング朝においてどのように、受容され、発展させられたのか、さらに以後の中世において、それらがどのように受容され、発展させられたのかということは、重要な問題であると思われる。

例えば、秘跡論、とりわけ聖餐論の問題を取り上げてみよう。古代末期の聖餐論として代表的なものは、アンブロシウスの *De sacramentis* である。しかし、この聖餐論に関して中世における最初のまとまった論考は、9世紀のパスカシウス・ラドベルトゥスとラトラムヌスなどの論争を通じて生れる。両者共に *De corpore et sanguine Domini* という表題をもつ著作を残し、その中で *substantia* が用いられた点は重要であろう。さらに11-12世紀においては、ランフランクスとベレンガリウスの論争に代表される熾烈な聖餐論争が繰り広げられるが、そこでは9世紀とは比較にならないほど文法学、論理学、哲学的概念が活用される。そして、この問題が再燃するのは、16世紀の宗教改革時代である。

つまり、アンブロシウス以後ほとんど取り上げられることのなかった問題が、9世紀に初めて取り上げられ、以後の中世キリスト教の知的世界にとって決定的な意味をもつのである。

聖餐論を例としてあげたが、むしろ、三位一体論や予定論などについてもカロリン

グ・ルネッサンス期が占める位置に関しては興味深い諸点が浮かび上がると思われる。前者については、清水氏も、アルクインの三位一体論、filioqueと養子論について触れておられるが、ゴットシャルクとヒンクマルの trina deitas に関する論争もそれに劣らず重要であり、この論争においてヒラリウス、アンプロシウス、アウグスティヌス、ボエティウスの著作が引用されている。三位一体の理解またその表現に関する議論が再び活発化するのには11世紀である。フェカンのヨハネスのように、アウグスティヌスとアルクインの伝統をそのまま継承するものもある一方、アンセルムスのように大胆な方法によって三位一体を論じる者も登場する。彼の *Monologion* は中世においては *De trinitate* と呼ばれていた。また彼は、ロスケリヌスを論駁するために *Epistola de incarnatione verbi* を、ギリシア教会との関係では *De processione spiritus sancti* を著した。さらに、ロスケリヌスは三位一体論に関してアベラルドゥスを論駁し、このアベラルドゥスをサン＝ティエリのギョームが論駁する。紙面の都合上、これ以上のことを述べることはできないが、11-12世紀の知的世界で生じた様々な問題は、その淵源をカロリング朝に見出すことができるように思われる。

いずれにせよ、上述のように、古代末期の問題群を整理し、カロリング朝におけるそれらの受容、展開そして影響を明らかにしていくことが今後の研究の課題となろう。現在の日本の中世哲学会においては、この分野の研究者はかなり手薄の状態であると思われる。今回のシンポジウムをきっかけとして、こうした領域の研究が積極的に行なわれることを期待する。

---

## 意見

森 泰 男

古代はいつ終わり、中世はいつ始まったのかということに関しては、西欧史と哲学史とでは事情が異なっている。すなわち、西欧史における古代は、一応西ローマの滅亡(476年)によって終わったと見做してよいであろう。そして、中世の成立は早くても9世紀であろう。それに対して、哲学史における古代の終末は6世紀であるが、中世哲学の遠い出発は紀元1世紀のアレクサンドリアに求められる。その限り、最初の数百年間は、古代末期の哲学と最初期中世哲学とが併存していた。山田晶氏は